

4日の昼食後、友人は、キリシタンが迫害を受けた津和野へ行ってみましょと誘ってくれました。クリスチャンであることを大事に考えて下さったのです。山口市の隣が津和野だということです。けれども津和野は島根県ですから、かなりの距離でした。だいたい、山口は名前のとおり、ポコポコとした小ぶりの山の口、山の口、山の口、と、山また山の場所でした。林檎園の看板が目についたので、南国で林檎とは珍しいと言いますと、ここは寒くて雪が降る場所だとのことでした。



しばらく走ると、赤褐色の瓦屋根の入母屋造りの立派な家々が山間にチラホラ見えてきました。とても素敵でした。瓦は石州瓦といい、固くて、雪が滑りやすいのだそうです。山の緑に映えて、赤い屋根が光り、絵のようでした。物置小屋のトタンまで赤く塗られているのには笑いましたが、トータル・コーディネートを考えている石見地方の実利とお洒落のコラボには感心いたしました。

やがて津和野に着きました。平日の津和野は森閑として人の気配がありませんでした。まず、森鷗外の生家を見学しました。御典医のお屋敷ですが、武家ですから、簡素、質素なものでした。ここで勉強したのか…などと覗いてみて、家もコンパクトだし、家具のない時代はフレキシブルに部屋を利用できたのだと納得しました。鷗外の作品をあまり読んでいないので、申し訳ないと思いつつ。



近くのお土産店、タクシー屋も無人でした。叫ぶと別のお店から店員さんが出てきてくれたので、和紙を求め、殿町通りへの地図を貰いました。殿町通りは小規模な観光スポットでした。



立派なナマコ塀を持つ武家屋敷が両側に立ち並び、直線 500m位の見事な石畳の通りが通っていました。掘割があって、花菖蒲が咲いていて、鯉がゆっくり泳いでいました。まるで時代劇映画のシーンかと思うような、整備された美しい街並みでした。そこで本家を名乗る菓子舗で名産の「源氏巻」を買いました。おまけだと言って源氏巻の切れ端を袋にいっぱい入れてくれました。その後、本来ならば、キリシタン殉教記念の地「乙女峠」に行きたかったのですが、前日の雨で急坂は登り辛いからと現地の方に言われ、再訪を願いつつ、友人のお宅へ寄ってホテルに帰ることにしました。



乙女峠 マリア聖堂

雪深い津和野に多くのキリシタンが流罪となって送り込まれ、食事を与えない、氷の張った池に投げ込む、火あぶり、小さい檻に閉じ込めるなど、様々な拷問を受けました。ここでの取り調べの覚書が残っていて、その中に迫害に耐えている信徒の言葉「私は少しも寂しゅうはありません。毎夜九ツ時(十二時)から夜明けまで、きれいな聖マリア様のような面影のご婦人が頭の上に顕れてくださいます。とてもよい話をして慰めてくださるのです。」も残っていて、津和野カトリック教会が記念のマリア聖堂をこの地に立てたとのことでした。